論説

インターネット民族誌の展望について

趙　旭東
（訳＝野口　武）

はじめに

インターネット時代における世界各国及び民族の文化は、すでに空間的かつ時空的制限を超えて世界各地のネットユーザーの前に現れている。この現象は、人類学に最もよく示された特徴として民族誌の記述のしかたにも必然的に大きな衝撃を与えている。このため、民族誌の記述手段にも、インターネット民族誌（Internet Ethnography）と呼ばれる新たな試みが現れている。本稿で述べるインターネット民族誌とは、主として、人類学で一般的に「フィールド」と呼ばれる考察領域における地理的空間を指すものであり、現今においてはネット空間上に視覚的空間をもって人類学研究者の前に現れるものであり、人類学研究者が考察領域に対して取り組む新たな長期的観察かつ、民族誌記述の新たな方法論について指摘するものである。

筆者はインターネットのように地理的境界線があいまいな空間では、人類学研究者が意図せずとも、目前に現れた超越的空間及び時間的要素に対しては、従来型の民族誌と異なる書式モデルを推し進めることが可能であると見ている。当然のように学術的な研究手法からすれば、インターネット民族誌は従来型民族誌の伝承としての学術的意義や、いかにインターネット民族誌の理論モデルが構築されたのかについて、ある程度の実践や詳細な討論を行うべきである。しかし同時に、文化研究を自らの使命とする人類学研究者は、インターネット時代に出現した広汎な文化的

現象に、無関心でいるか、そのままの状態にしておくということはありえない。本稿の内容は筆者自身のこれらの認識に基づき、出発点を導き出すものとして、日中両国の研究者と人文社会科学の方法におけるインターネット民族誌の実現的可能性を検討しようとするものである。

一　インターネット民族誌とは何か

無論、人類社会のいずれかの発展段階から現在に至るまで、知識体系としての人類学の民族誌的記述における主要な目的は、人類学研究者がもつ特徴を通じて、異文化社会と呼ばれる文化や社会で観察と記述をすること、ならびにその記述された社会文化にある価値に対して、学術的意義を備えた評価をすることである。さらに、記述された内容は、異文化交流や異文化理解の媒介を促すものとして世に伝播するものである。このため、そうした特定の民族がとった記述は、民族誌としてなされるものである。出版刊行された民族誌は、さらなる群衆の目にさらされることによって、文化伝播の効果が生じるだけでなく、描かれた社会や文化が人類の文化的知識体系の一部として構成される普遍的意義が付されることとなる。当然、否定できないのは、従来型の民族誌の主体は基本的には中心社会によるものであり、中心社会で人類学分野のトレーニングを受けたことがある研究者ないしは知識人によるものであり、言うなれば非文明社会や周辺少数民族社会に対して取られた記述である。このため多くの民族誌の内容が、地域社会の文化的記述や評価について、多少の学問的理論や、あるいは中心社会の知識体系によって規範とされてきた。このため、その記述された内容や下された価値判断は、無数に引用あるいは参照されてきたなかで、人類社会の文化類型に対する分類や、各種文化に対する価値評価の基準を次第に生み出していった。

しかし、インターネット民族誌の方法は、ネット空間の多くの人々の前に出現し、時空を超えて相互間で十分な情報が共有され、自身の前に現れる地理的地域社会を突破して、ひとりだけで記述する方法で実施することができる。したがってネット空間に可視化された文化の伝播は衰退した各種文化間の差異にも至るため、目前の社会文化に同時に現れた価値基準に対しては唯一の評価と見ることはできない。このため予見し得ることとして、ネットワーク手段で行われた民族誌の記述と、記述手段による民族誌と、この二つの記述ないし文化伝播の手段は、人類学に比肩する方法であると見ることができる（二つの方法）。

世界各地のフィールド地点における外部の知られざる「好奇心」に関しては、人類学研究者がとりわけ関心を注いでいるところである。人類学研究者の彼ら自身が用いる

言語や言語環境には、いわゆる記録された「好奇心」の部分があり、実際には現地の言語や、習俗、社会組織、歴史的伝承が含まれている。このため、人類学研究者が現地社会の価値観から生み出した外界に対する「好奇心」の記述は、人類社会科学の体系に及ぶものである。したがって、インターネット民族誌と、記述方法による民族誌のこの二つの方法が、人類学分野でさらなる発展を遂げるものであり、人文社会学に必ず影響を与えるものであろう。

　現在、ネット空間に現れたさまざまな情報は、無意識下で過去に断片化された異文化に対して、時空を超えては存在せず、見聞きした者たちによって共有された文化を生み出している。例えば、中国国内では、従来の大衆向けニュースについては、現在は、すでに各種ネットワークのメディアを通じて理解されているため、至るところで見聞きされた日常的話題が生じている。したがって、現在は、人々が以前のような受動的情報の受容体となるのではなく、どの人間も能動的にさまざまな情報を得ようとしており、さらに自ら好んで情報を選別している。特に、多くの人が意識的に彼らの言う新たな文化に対して着目しており、要するに従来は彼らに理解されなかった新たな文化であり、人類学研究者の関心を引く「好奇心」でもあるのである。このため、ネット空間に現れた各種の「好奇心」は、人類学研究者の専売特許にはなることはなくなったのである。

　これと同時に、こうした現実の下で人類学研究者に注意を要することは、インターネットの出現やその各種異文化に対する伝播や普及によって、伝統的異文化の伝播が媒介した民族誌の記述と衝突してきた話をするよりは、異文化理解や伝播に最も有効である人類学について述べるものとして、文字の記述もネットの伝播も、すべて民族誌を記述する手段としたほうがよいということである。筆者は、文字手段による民族誌がより重視されるのは現在の現実と過去の現実との関係であると捉えているが、インターネット民族誌がさらに重視されるのは、現在における現実的な即時性と再度創造されることのない記述にあると考えている。[1]両者の共通点としては、「文化を記した」民族誌をもとにして作られた人類学的な知識体系であり、社会の当時について記述されたものであり、つまりは「現時点」の情景を記述して生まれたものである。

　このため、仮にとある人類学者が二〇〇〇年代のとある午後に、十年前か二十年前のフィールドの記述を持って来るとするならば、パソコンで関係する内容をインプットし、入念に編集審査をし、伝世文献の出版を意図した話を準備するわけであるが、とは言ってもインターネット民族誌の観点からすれば、この人類学者は後れを取ってしまうところがあるのかもしれない。こうしたことは、ネット上

に現れるいまどきの文化の現実なのか、あるいは現在の文化的解釈に対するコンテクストの変化なのか、この人類学者が関心を払わなかったためなのかもしれない。当然、現在は、中国国内の人類学学界においては、従来型の民族誌とインターネット民族誌の二つの方法論について異なる見解が生じている。例えば、インターネット民族誌の手法に魅了された側からすれば、人類学研究者ひとりが熱を上げた「好奇心」であって、インターネット時代においては、大衆に共感され視覚的に消費される文化となったことで、つまりは、従来から「個人的にもたらされ」た「好奇心」なのであり、次第に大衆文化に転換していくものであって、他の異文化社会の異文化に対するものではない。このため、こうした全体社会の文化的異化は、多くの古典的人類学者から言わせれば、「嗚咽」するようなものであろう。しかしながら、人類学の研究対象だけでなく、各個別の社会形成や社会保障の各種条件が、とりわけ眼に見えない部分の条件が毀損されないのであれば、従来型の民族誌は新たなインターネット民族誌と、人類学学問の方法論に対して、ある程度の影響力を有していると言えよう。

そうした、ネットに現れる即時的なシーンが描かれる民族誌を重視することに関しては、その主な特徴として、ネット上の即時的な表現方法によって、以前から緩やかに姿を見せてきた従来型の書式モデルに取って代わるということであろう。例えば、中国国内で出版刊行された著作あるいは論文は、録画された映像誌があるとはいえ、必要な審査や修正添削の過程を経て、ようやく模範として社会に示すことが可能となる。実際に、執筆者と出版側にとっては、願うわけでもなく思いどおりにならない過程である。とはいえ、この過程で生まれた学術的権威は、社会において広汎な影響力を持つ。ゆえに、執筆内容の真実性や権威性は、質疑や挑戦を受けてもよいものであり、その権威ある地位は影響を受けるものではない。これに対して、インターネット時代における大多数の若手研究者の感覚は過去に関連した異文化の執筆内容において真実には至らず、権威化された内容とその意義に終止している。このため、中国の若手人類学研究者は、インターネット時代のなかで、従来型の民族誌の書式モデルを放棄し、過去の現実をもうち捨て、現在のインターネット民族誌研究を直接進めていくしかないのかもしれない。

加えてこうした過去の現実をうち捨てることは、現実的で実際的なインターネット民族誌を重視するということであり、従来型の民族誌の手段にこだわる人類学研究と共生共存することは、学術面においては正常な現象であると言える。筆者は、異なる時代と環境のもとで研究者となったが、とりわけ異文化研究に執心してきた人類学研究者として人類学のもたらした環境について指摘するならば、従来

の民族誌研究者とその成果は、前述したように、その中で、否応なく審査されて生み出されてきた民族誌であり、その多くが地下室か書斎のなかで値千金の宝物として私的に収蔵されていながらも、言うなればそうした記述が、学術研究の資源となるものであり、みな後世の人々に数多の価値ある教訓となる書式モデルを提供するであろうし、少なからず検討される対象にはなるのであろうと考えている。したがって、インターネット時代を前提に、即時的に記述され、思想の自由によって左右されることのない学術的な観点は、従来型の民族誌の記述を通じて、我々人類社会の過去を見ることができるようになるのであり、このためにインターネット民族誌は、ついには未来社会の歴史的文献となるのであろう。

したがって4Gから5Gにかけて、チャットからライブ、ブログからタイムライン、メールからライブコマースに至ったインターネット時代には、人文社会科学の体系をまたぐ人類学、特にネット時代に成長した新世代の中国人類学研究者からしてみれば、従来型の民族誌は最終的には人類学研究の主体的方法にはなることはないのだと言えよう。しかしながら、学術的観点から述べれば、インターネット民族誌を構築する過程では、その多くが試験的に活動すべきだけでなく、インターネット民族誌の理論を確立する学術的討論を行っていくべきである。初めに現れたものと同じように、実証研究を経て出現した文化相対論、構造機能論など、最終的に人類学の体系を決定づけた基礎理論と同じように、検討過程が求められるものである。この過程は人類学を発展させる新たな構想となり、ひいては学術的革命となるであろう。筆者からして言えば、この構想あるいは革命の問題提起は以下のように問いかけることができる。仮に従来型の民族誌が現実的意義を持たないのであれば、それは、現実的な意義の民族誌がいかなる方法で出現するのか、ネット時代の民族誌は学科体系の人類学的特性を否応なく体現し得るのであろうか。

インターネット時代では、世界各地の各民族の衣食住、交通、ツールなど、人類の生活に不可欠な要素を構成する、文化、あるいは異文化となるものが、次第に「ネットワーク＋プラットフォーム」によって時空超越的に広められ、即時的に現在の人々の前に現れる。このため、人類学に見られる地理的あるいは物理的フィールド、個人社会、個人及び文化も、目前の非物理的事実となって存在するようになる。〔2〕こうした変化は、人類学研究者にとって、いかに自身から遠く離れたフィールドであっても目の前のフィールドに現れる現実を、学術的意義の範疇にあるフィールドに昇華させるように、こうした問題に向き合わざるを得なくなったのである。これら避けざるを得ないものとして、ネットワークを媒介にして現れる事実の真偽

や、その事実に対する学術的解釈の方法論をいかに判別するのか。これはどの人類学研究者にも蓄積されたものであり、対象とする社会や文化の理解を解釈する基礎的知識に関連することでもある。したがって、視覚的かつ即時的に現れる文化や社会に関して、記述者の記述した物理的痕跡が拡散されていく恐れもあり、広い範囲にわたって賛否両論の評価を受けるものとなるであろう。その上で、構想レベルにあるインターネット民族誌がいかに学問体系の壮大な意義を生み出すのかは、当然多くの価値ある検討課題をもつものであり、新たな方法論になるとは言え、学術界に関心を引き起こし、価値をもたらすものになるであろう。

二　インターネット民族誌における　フィールドとは何か

自ら現場に訪れるフィールドワークを主体的手段とする人類学研究者について指摘するならば、インターネット民族誌が関心を注ぐ現場、すなわちフィールド地点とはネット空間のことである。また、そのフィールドの多くがウェブサイトや、映像シーンであり、情報ソースになるものである。さらには変幻自在のさまざまなスタイルで、いつでもどこでもアクセス可能なウェブ百科全書型のフィールドのことである。

これに対して、人類学の基本となる民族誌に代表されるのは、研究者が例えば村落やコミュニティレベルのミクロ社会を対象に、現地での長期的調査に参加した後で、現地の社会構造や文化的特徴について記述することになる。マリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』や、『未開社会における犯罪と慣習』、『珊瑚礁の庭園とその呪術』はその代表的なものである。これらの著作は西太平洋のトロブリアンド諸島の社会を対象として、現地で暮らした二年のなかで、彼が把握した現地人の言語や現地文化の理解をもとに、[3]「科学的民族誌」と呼ばれるモデルでまとめられており、ポスト人類学時代の民族誌の地位を確立するものとなった。

このほかに、ハワイ大学の人類学専攻でオバマ前アメリカ大統領の母親でもあるアン・ダナム（S. Ann Dunham, 1942–1995）の博士論文『インドネシアの農村工業』も、インドネシアの農村社会の現場を考察して完成させた大作である。[4]この論文はダナムがおよそ一四年間の時間をかけて（一九九二年に博士学位を取得し、三年後に逝去）完成させたものである。このほかにも多くの人類学者が、その一生をかけてなんらかの特定の考察対象について、長期的な考察と研究を続けている。その考察対象の大多数の村落がフィールドと呼ばれるものである。

人類学で述べるところのフィールドワークとは、個別の

人類学研究者が経験せねばならない科学的トレーニングのプロセスでもある。前述した二つの事例のように、人類学研究者は考察する社会の現地人の言語を把握しなければならないし、長期的あるいは持続的に現地で生活し、現地人の身分で現地社会の生活及び生産や宗教などの活動に立ち入らなければならない。その期間に記述された内容は、影響力のある一次資料となり、その上で人類学理論の枠組みで分析された民族誌となる。その後、同一社会に対して考察した人類学研究者は、一定の権威と基準値を持つことになる。人類学で知られる費孝通の江村研究もその一例である[5]。

情報がグローバル化したインターネット時代においては、世界中で、中国国内のおよそのマクロ社会と文化を包括し、物理的境界や文化異同の障碍を乗り越える必要もなく、言語の制限も受けず、世界各国のネットユーザーの前に自然に現れている。さらに個人の身振り手振りや顔の表情を含めた内的身体言語、行為による手段、及び言語表現による手段、精神状態など、過去の人の知りもしない閉鎖的な「小世界」が、みなインターネット空間の不可欠な構成要素となっている[6]。これに関しては、従来の人類学で言うところの「小世界」が、いわゆるフィールドのことであり、インターネット時代において、時間的、超越空間的なものによって、世界各地の人々の前に現れるものである。別の地域の人々は同一のネットワーク世界で生きている。これら「小世界」が数字化された形に加えて擬似的な形式で現れるものであるとはいえ、現実の存在や真実から生まれた事実をモデルにして、人々の眼前に現れるものである。こうしたインターネット時代に生きる人類学研究者も、インターネットの世界に現れる現実や事実に興味を引かれるのはやむを得ず、彼らの言うフィールドもまた変化していると言える。

著作に関して指摘するならば、初期の人類学研究者が先住民の生活や思考モデルを記述した民族誌は、大多数が書斎にある快適なゆりかごで想像されたものであると言える。そうした想像とは「とある農夫が馬を失ってしまい、彼は駆けては行かずに、家を出て、馬を探しに行き、馬を探して戻ってきて、厩に手綱が途切れないようにつなぐと、私が馬であれば、私はどこへ行くのだろうと、独りで思いを巡らす」(Now if I were horse, where would I go?)[7]ようなものである。マリノフスキーの後には、オバマの母親のように、多くの中国人研究者が書斎から離れた長期のフィールドワークを行う人類学者として世に輩出していった。しかしながら、二一世紀初頭にはグローバル化が普及し、二〇世紀後半になりインターネットが現れ、二一世紀初頭にはグローバル化が普及すると、人類学者のなかには書斎に回帰する現象が現れた。多くの人類学研究者がパソコンのスクリーンに映った遠くでの彼らひ

表1　民族誌記述を学ぶ三局面

三局面	名　称	理　論	方　法	時間軸
I	書斎的人類学	進化論	時空的距離	19〜20世紀
II	フィールド人類学	機能主義	古典的民族誌	20〜21世紀
III	インターネット人類学	表象主義	断片化された生活	21〜2N 世紀

とつひとつの「小世界」に引き込まれ、これらの現象について即時的な感想を発表し、あるいは研究者レベルの意見を表明している。人類学で言う村落や諸島、地域、コミュニティなどの伝統的意義に対するフィールドは、現在は、みな彼らの前に現れたネット空間による現場あるいは情景となっているのである。

　地理空間とネット空間が併存する現状では、二つの空間のフィールドワークをいかに結びつけるのか、あるいは地理的フィールドによる考察からネット空間のフィールドに置き換えた考察を、いかに「サイバネティック人類学」あるいは「インターネット人類学」として知らしめるのか。筆者はこれを、メディアの多様化した中国国内の人類学が直面する現実的課題であると考えている。当然、言うまでもなく書斎的な民族誌であっても、フィールド的な民族誌であっても、あるいはネット的な民族誌であっても、これらは共通した特徴を備えている。学術的観点から見れば、そうした特徴は少なからず三つのフィールド空間のモデルに言い変えてまとめることができる。

　まずはフィールド空間の変化である。この種の転回で最も顕著に現れたのは、過去の西洋社会を中心として、非西洋社会の空間的な「汎」の定義に関するものである。この汎の定義とは、一九世紀以後に社会進化論の影響を受けた初期の西洋人類学界において、文明世界と非文明世界の基準を区別したものであった。この背景には、中世以降の特にヨーロッパの啓蒙運動の後、西洋社会の関心から、人種的起源の時間的な問題を、地域空間における先進性と後進性を徐々に区別して比較し、あわせてこれに関する問題の徹底的な解決策を求めようとしたことにあった[8]。前述したように、マリノフスキーに類似するいわゆる未開社会に対する現地考察は孤立した存在を描くものであり、同時に特有の文化を備えた社会のエピソードでもある。そうしたエピソードは区別されない非文明的な空間的存在として実証されるものであった。こうした「我々」の「西洋世界」を、「彼ら」の非西洋社会の空間的境界とすることによって生み出された人類学のフィールドモデルは、今日の人類学者には次第に忘れ去られていった。そしてインターネッ

ト民族誌が出現すると、このモデルはさらに崩れつつあるのである。

つまり、インターネット民族誌は前述したモデルによってもたらされた断片化された人類文化であると言える。人類社会の備える共通文化を構築することは、各個別社会や人類全体の社会関係を追い求めて行くことによって、その未来へ向かう方向を見据えることができるのである。こうした過程においては、人類学が歴史や権力関係の問題意識を生み出すものとなるであろう。[9] ネットワーク下では、人類学研究者はインターネット手段を充分に利用するだけでなく、さらに多くの空間を視覚的フィールドとなし、現地人と距離が離れていても、密接に接触したり連絡したりすることができるし、加えて自分の見解を時空超越的なネット空間に広めることができる。こうした手段は、それ自体が文化的伝播を媒介する民族誌となるであろうし、その上で大衆化すれば、文化伝播の意義も持つようになるであろう。

科学史的観点から、筆者は表1のように、民族誌の記述を「三つの局面」として捉えられると考えている。

三 社会的文化距離の変化とインターネット民族誌

現代社会に生きる人類学研究者は、生活する社会全体での変化の衝撃を受けないものはない。なぜなら、人々の眼前に生じる一切の変化は、どの人類学研究者の人生にとっても密接に関係するためである。この変化とは、人類学研究者が対面せざるを得ない現実である。そのなかでも、人類学研究者について言えば、かつては遠くの距離で観察する「他者」であったが、今日では近い距離で眼前に現れるものとして、避けられない現実ともなっている。特に中国では、イメージの新たな各種メディアに公開された「他者」と視聴者の評価によって、人類学研究者の記述内容や思考的枠組みにも影響している。こうしたチャレンジに立ち向かうには、従来型の民族誌が新たな方法で対応していかねばならない。

前ネット時代の、各空間の地域社会では、「あなたはあなたで、私は私、あなたと私の間には互いの違いが存在している」(〝你是你、我是我、你我之間存在着相互的差別〟)といった距離感が多く現れていた。この種の距離とは、特定の条件のもとで形成されるものである。したがって、どのような社会でも自らの運用システムで自らの社会に存続

する生命力を維持する必要がある。一八世紀前半のフランス啓蒙思想家であったモンテスキューが『法の精神』で述べているように、異なる地理的空間や気候的特徴が、別の社会制度及び政治経済形態を形成する第一の条件である。人類史に現れるいずれかの社会では、その形態は往々にしてその社会の所在地となる自然風景を投射する。例えば、マルセイユ地方の人々の倹約公正かつ慎み深さの特徴は、貧しい土地や供給不足に対峙するなかで制定された長く続いた効果的な慣習である[10]。言い換えれば、モンテスキューは閉鎖的空間のなかで生じた社会文化や空間環境の関係に着目していたと言える。

社会文化や空間環境の関係は、いわゆる文化差異の要素を形成するのかもしれない。しかし、こうした要素は一九世紀後半になると、むしろ社会進化論の影響を受けて、西洋世界で文化的距離化や差異化が苦心して生み出されたことで、いわゆる「未開化」や「原始」がその事例となった[11]。第二次世界大戦後になっても、人類学界は「ポスト植民地」再考の挑戦を受けて、E・サイードの『オリエンタリズム』批判が現れたが、現今に至っては民族紛争が続いており、宗教的対立もなお表れているなか、こうした当初からの西洋白人中心主義によって組み立てられた文化的距離化や差異化の現象が未だ消え去ってはいないのである[12]。

幸いなことに、インターネット時代においては、これら東西世界の文化的境界が次第にあいまいなものに変化しており、同一地球上に住む人々は、各種のSNSという手段によって、各地の風土や人情をネットワーク空間に公開することが可能であり、かつての距離化され差異化された文化的境界や地理的国境は次第にあいまいなものとなっている。そうして現れたものが高度科学技術によって生み出された新たなネットワーク世界となるのであって、アメリカのコラムニストであるトーマス・フリードマンの言う「フラット化する世界」となるのである[13]。こうした東西の世界文化の境界があいまいになり、徐々に頻繁かつ対等に相互間の情報交換がなされるなかでの文化的差異の共有は、干渉される要因があるというだけでなく、すでに否応なく日常生活に溶けこんだものとなっていることからも明らかである。そうしたなかで個人がインターネットから必要な情報を得ようとする過程においては、関連情報に対して文章や動画の評価を下しており、それら評価も情報として、インターネット空間で広く伝播していくのである。

人類学界は文化に対する共通認識を定義することが困難であったとしても、文化は価値を表す手段であり、その価値観が変化したとしても、現在の文化が移ろいゆくなかに現れていくものである。インターネットは人々の物質的生活に技術的利便性を提供しているだけでなく、人々に新たな価値を生み出す契機をよりはっきりと与えている。この

ため、各地の人々が実際に生活するなかで各自の生活手段を保ち続けたとしても、インターネット空間のなかでは、何らかの国際的あるいは国内的事件に対して、同様の立場で自らの見解を示すことが往々にして可能である。そのような同一的な立場では、人々が閲覧や記述、及び文化的伝播を通じて形成した価値観である。[14]

例えば、二〇二〇年五月末にアメリカのミネアポリス市街で騒動が起きた際には[15]、中国の街頭各地のデリバリーサービスが、インターネット空間内において、すべてリアルタイムで、世界中の人々の気になるホットトピックとなった。このホットトピックは、個人的嗜好による評価が転送、拡散されて、さらにネット空間を占拠することとなった。さらに、閉鎖的空間内での活動であっただけでなく、インターネット世界のなかでは、各種メディアによる拡散を通じて明示された文化となり、公開された文化となった。これらネット上で公開された文化は、明確に、固定化したエリート層に代表された文化を改め、世界各地で他の社会階層で共有された文化を、あるいは好奇心を打破することとなった。

伝統中国を例にとれば、家庭の出身や姓名、家系、姻戚関係などが機能的な続柄観念を有しており、伝統的中国社会の特徴を構成するものであり、社会的交流手段を生む固定的要因でもある。例えば、大家族の出入りがある家での「続柄」は、貧しい農民には容易に手の届かない社会的ボーダーラインである。しかしながら、インターネットのもとでは、こうした手の届かない境界は存在しない。現在、中国のネット空間内では、〝門戸〟(家柄)の名でウェブサイトが立てられ、ウェブサイトの門構えも多種多様であるものの、中身は大同小異である。とはいえ封建時代の〝門戸〟とは異なり、彼らの〝門戸〟はすべてのネットユーザーに向けられているものである。そうした顔と実名が覆われたなかで一切憚られることのない言論が、合理的必要性をもつ別の論説となるのかどうか、そうした社会階層に関わらない言論というのは、ひとつでもあり、階層を分かつことのない群衆の平等なリンクを同じネット空間内に接続することで、可視化された社会階層の境界が次第にあいまいなものとなっていくという例証ともなっている。

このようにして、ネット空間は伝統的なフィールドを考察した民族誌の記述手段において、非現地的視野と動態的考察手段を次第に導入していった。つまり、インターネットの超越した地理的社会の特徴としては、いつ如何なる地においても発生しどのようなことでも出現することがネット世界の共通の事実となっている。あわせて、人々がいつでもさまざまな事実をコピーし、ダウンロード、転送することができる。そうしたプロセスで使用される言語については、古い語彙を新たな文脈的意義に収めるだけでなく、

キャリッジリターンやドキュメント、コピー、メモリ保存、デリートなど統合された言語の如く、ネットの利用効率を高めている[16]。このように、民族誌研究者もネット言語利用の利便性に依拠することが可能であり、さらに広範なフィールドのなかでの文字や言語音、画像及び動画レベルでの情報を探して、理性的な評価を下すことは、過去に人々に知られることのなかった社会的文化価値を高めることもできるのである。

現在までに伝わった碑文や岸壁画が、人類文明の形成過程に欠くことのできない古典的著作を考証するものとなったことと、現在思いのままに携帯電話で書いたファイルの文字が、記録データとして扱われていることは、その意義が同じものであるとはいえ、使用され伝播された方法が大いに異なる。前者は人々が自ら石碑や崖石を求めてから、碑文や岩絵に対して精緻に観賞するようになって、はじめてその意味を図ることができるのであり、したがってその伝播する範囲には限りがある。しかし、ネット空間に現れた情報は、ひとつの記号的なコードであり、古典的著作にすらなり得ないとはいえ、人の手でスクリーンに触れて、一瞬にして時空を超越し、いかなる個人的なネット空間内であっても拡散することができしてしまう。

このため、これら統一された記号が簡単に伝播する形態は、エリート集団や草の根集団に互いに共有された情報を提供するだけでなく、さらに無形のなかでエリートと大衆文化の壁や文化的階層の固定化を消し去っていくものである。言い換えれば、いわゆる文字の記述は、過去にそうであったように、エリート集団に独占されるのではなく、さらに草の根階層の文化的普及の一手段となるものである。

おわりに

現在、中国国内では主に「百度」や「Google」で百科全書的情報が得られており、多くの情報がこの二大サイトによって壟断されている恐れがある。しかし、民族誌研究者にとって否定しきれないのは、少なからずこの二つの「クラウド」と呼ばれるネット空間内を通じて、彼らの情報にあるフィールドが目の前で記録されることで、さらにもうひとつの民族誌の資料が得られるということである。加えてこれら資料が民族誌研究者の記述内容に採り入れられるなかで、既存の民族誌の内容を補足することも可能である。こうした従来型の民族誌に新たな生命が吹き込まれることは、インターネット民族誌の学術的意義を付加するものでもある。このように現地から遠く離れていても、現地文化を記述する手段となる。現在中国学界で「クラウドライティング」と呼ばれ、「クラウド空間」を跨いだフィールドの記述が、「クラウドストレージ」の資料を参考にし

て「クラウド民族誌」を記述しており、まさしくインターネット民族誌の兆しが、中国文化人類学界で姿を現しているのである。

こうしたインターネット民族誌の記述方法が、前述したように、人類学分野で認識されるかどうかはさらなるプロセスを必要とするであろう。しかしながら、ネット世界に現れるフィールドとしては、人類学からすると衝撃であると言わざるを得ない。この衝撃とは、人類学研究者がグローバル化に関する新たな民族誌の記述方法に対して考察する際に大きなバックグラウンドになると筆者は考えている。すなわち、遠からず将来において、さらに多く拡散されているコピーされたネット文字、写真や映像音声の材料が人類学研究者の前に現れ、これらがみな民族誌を記述する素材になるかもしれないということである。とりわけ郷土の血縁的人間関係を重視する中国社会のなかにおいては、血縁関係に依拠して現地の社会文化を考察する研究方法が、インターネットのもとで、血縁関係を必要とせずともネットに提供される動態的情報を通じて民族誌の記述も充分に行われていく可能性がある。

それでは、インターネット民族誌は以下のような仮説を可能とするのであろうか。

第一に、インターネット民族誌の記述が文化的伝播空間を拡大することである。前近代の時期に人類学者が出版したフィールド民族誌は、その多くが無文字社会の見聞に対して生み出されたものであった。近現代になって人類学者が中心社会の周辺社会を対象にした民族誌の記述を取ると、ペンと紙でそうした記述方法をもとにしただけでなく、当然、異文化伝播の媒介的作用を引き起こしたが、しかしその伝播空間も知識層に限られていた。ネット時代になってからは、人類学研究者はネット空間の観察から記述したものや、あるいは得られた関連情報を、同様のネットワークで形成されたネット文体を用いて、ネット空間の広い範囲に伝播させており、その範囲は人類学界や知識層に限られることはなくなっている。ネット空間あるいはネット文化が形成されることは、インターネット民族誌の記述の前奏曲を奏でるものである。個人でその境界に臨む人類学研究者は、時代的感性をもつ民族誌をいかに描くのか、向き合わざるを得ない現実でもあるのである。

第二に、ネット時代は、すでに人類学研究者の得た民族誌がある種の非文書的な記述方法のなかに取り込まれていることである。前述したように、従来の地理的空間の限界は、すでにインターネットに超越され模倣されて、ひとつのキーワードを入力すれば、得たいと思う関連情報をすべて取り出すことができるようになっている。であれば、個人の提供した情報は、ネット世界のすべての住人がみな自由に捉えることができる情報となっていくのかもしれな

い。人々は情報の伝播を通じて、時空を跨いで生まれた情報がコミュニティに共有され、さらにその母体となるコミュニティによってまた多くの共同体が派生していくのであろう。言い換えれば、いかなる人類学研究者であっても、ネット世界の広大な空間内で自発的に生きていかざるを得ず、あわせてそうした空間内では従来まで自力でしか得られなかった無数の情報にさらにアクセスしていくことができるようになるということである。

第三に、インターネット時代において、民族誌の記述は記述者が現地で得た一次資料に依拠することがなくなるであろうということである。現在、従来の多くが記述されていた社会のなかで、自分で記述し得る集団が多数出現している。彼らの記述や口述での内容は、現在のネット空間のその場に現れたとしても、現地に関係する知識が人類学研究者に独占されることはない。また、例えば「微信モーメンツ」(WeChat Moments)に公開されたその人の考え、またはその人の想像は、ひいては民族誌の記述素材であり、現地人がチャットした内容によって得られるものとなるであろう。当然、複雑に錯綜する回路で構成されたネット世界から見れば、最初の発信源や伝播ルートを探すことは困難かもしれない。しかし、それらネット世界に現れた一次素材は、人類学研究者のネットワーク技術や学術的分析を経た後に、理論的価値のある民族誌が生み出されるようになるのかもしれない。

このようにどこかの人類学研究者が行った「三次元」的な民族誌の記述は、クリフォード・ギアーツ(Clifford Geertz)が「詳説した上での詳説」であると指摘している〈17〉。この特徴は現在の多岐にわたり枝分かれした人類学界に体現されており、とりわけ関連領域においてより広範となった人類学界において現れている。このためインターネット民族誌が仮説となるのかどうかは、「越境の王者」(越境する人文社会科学)と呼ばれる人類学分野の特徴を、真に体現し得るのかどうかということであろう。筆者は刮目してこれを待ちたい。

注

〈1〉 James Clifford and George E. Marcus, *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, Berkeley: University of California Press, 1986. 中国語訳に、詹姆斯・克里福徳、喬治・馬庫斯編(高丙中、呉暁黎、李霞など訳)『写文化——民族志的詩学与政治学』商務印書館、二〇〇六年。

〈2〉 趙旭東「記住人類学——基于一種文化、個人与社会維度的新総合」『広西民族大学学報』(哲学社会科学版)、第一期、二〇二一年、一三一—一三五頁。

〈3〉 Bronislaw Malinowski, *Argonauts of the Western Pacific*, London: George Routledge & Sons, 1922; Bronislaw

Malinowski, *Crime and Custom in Savage Society*, London: Routledge & Kegan Paul, 1926/1961; Bronislaw Malinowski, *Coral Gardens and their Magic, I: The Description of Gardening*, London: Routledge & Kegan Paul, 1935; Bronislaw Malinowski, *Coral Gardens and their Magic, II: The Lanuage and Magic of Gardening*, London: Routledge & Kegan Paul, 1935.

〈4〉 S. Ann Dunham, *Surviving against the Odds: Village Industry in Indonesia*, Durham: Duke University Press, 2009.〔訳注＝日本語訳のものとして、アン・ダナム著、加納啓良・前山つよし訳『インドネシアの農村工業——ある鍛冶村落の記録』慶応大学出版会、二〇一五年がある。〕

〈5〉 Hsiao-tung Fei, *Peasant Life in China: A Field Study of Country Life in the Yangtze Valley*, London: Routledge & Kegan Paul, 1939. 中国語訳に、費孝通『江村経済』北京：北京時代華文書局、二〇一八年。

〈6〉 趙旭東「視頻直播的民族志書写——一種信息伝輸由微信而及快手的文化転型人類学」『中原文化研究』第二期、二〇二〇年、五八–六六頁。

〈7〉 人類学者のラドクリフ・ブラウンが述べた物語で、「if-I-were-a-horse」。Max Gluckman, *Politics, Law and Ritual in Tribal Society*, Oxford: Basil Blackwell, 1965/1971, p. 2を参照のこと。

〈8〉 Johannes Fabian, *Time and the Other: How Anthropology Makes its Object*, New York: Columbia University Press, 2014, p. 27.

〈9〉 奥特納（Sherry B. Ortner）著、趙旭東訳「実践中的文化」（Culture in Practice）劉東主編『中国学術』第二五輯、第七巻第一輯、北京：商務印書館、二〇〇九年、一六–三九頁。

〈10〉 モンテスキュー著、張雁深訳『論法的精神』下、北京：商務印書館、一九六三年、一八頁。

〈11〉 趙旭東「中心重構与他者観照——基于中国人類学世界観的考察」上、『探索与争鳴』第一一期、二〇一八年、八–二一頁。趙旭東「中心重構与他者観照——基于中国人類学世界観的考察」下、『探索与争鳴』第一二期、二〇一八年、五八–六九頁。

〈12〉 Edward W. Said, *Orientalism*, New York: Pantheon Books, 1978.

〈13〉 弗里徳曼（Thomas L. Friedman）著、何帆、肖瑩瑩、郝正非訳『世界是平的——一部二十一世紀簡史』（*The World is Flat: A Brief History of the Twenty-First Century*）湖南科学技術出版社、二〇〇八年。

〈14〉 卡斯特（Manual Castells）著、夏鋳九、王志弘など訳『信息時代三部曲——経済、社会与文化』（*The Rise of The Network Society*）第一巻（網絡社会的崛起）、北京：社会科学文献出版社、二〇〇三年、一–三二頁。第一巻の『網絡社会的崛起』はインターネット社会の概念を提示し論証している。

〈15〉 二〇二〇年五月二五日に、アメリカのアフリカ系男性であるジョージ・フロイドが白人警官のデレク・ショービ

ンによって「膝で喉を押さえつけ」られて殺害され、ミネソタ州ミネアポリス市で連日抗議デモが開かれ衝突し、政府によって夜間外出禁止令が出された。

〈16〉こうした形態はコンピューター処理の「マシン言語」としてひとくくりにされており、哲学者のマイケル・R・ハイムは「電子言語——文字処理の哲学的基礎」（*Electric Language: A Philosophical Study of Word Processing*）のなかで、「哲学からみれば、ワードプロセッサがある種の記号や言語ないし実在の新たな関係を生みだした」と指摘している。海姆（Michael R. Heim）著、金吾倫、劉鋼訳『従界面到網絡空間』上海：上海科技教育出版社、二〇〇〇年、「前言」の部分。

〈17〉ギアーツの解釈人類学は、ネット時代のフィールドワークに対しても依然として適用されている。彼によれば、フィールドワーカーの根本はつまり「詳述した詳述」（explicating explications）であり、解釈した上で解釈を重ねようとすることである。これは絶えず接続された循環的なチェーンリンクであり、人のまばたきのように「ウインクにウインクを重ねる」（Winks upon winks upon winks.）ようなものである。Clifford Geertz, *The Interpretation of Cultures: Selected Essays*, New York: BasicBooks, 1973, p. 9.